

多高通信

令和三年度防災教育特集号

令和4年3月31日発行
宮城県多賀城高等学校
宮城県多賀城市笠神2丁目17番1号
TEL:022-366-1225 FAX:022-366-1226
https://tagajo-hs.myswan.ed.jp/



内閣総理大臣より「防災功労者」表彰を受賞しました（令和三年九月）

過日、本校は内閣総理大臣より「令和三年度防災功労者内閣総理大臣表彰」を受賞しました。これは「日頃から防災思想の普及または防災体制の整備に尽力し、あるいは災害時における防災活動に顕著な功績のあった個人または団体」に贈られるものです。平成二四年から一〇年間継続してきた津波標識設置活動、県外・海外からの来校者に対して生徒が行う被災地域の「まち歩き」の活動、そして災害科学科の設置など、本校が創意工夫をこらしてきた防災教育が高く評価されました。

この表彰を受けて、本校災害科学科三年・江戸葵さん、秋澤綾香さん、生徒会長・菊池せせらさん



伊東教育長と共に記念撮影（宮城県教育委員会）



災害科学科一・二年生一〇名が、令和三年八月一〇日に東日本旅客鉄道株式会社（JR東日本）宮城野運輸区の協力により、電車に乗っている時に地震・津波警報が発令された場合の避難方法についての意見交換を行いました。

まず、JR東日本の安全対策を職員の方から紹介いただき、本校災害科学科の取組を発表しました。それらの取組をもとに、高校生から率直な質問をさせていただきました。JR東日本宮城野運輸区には本校の最寄り駅である下馬駅があり、通学等で日常的に利用させていただいている生徒も多くいたため、最初は緊張した様子だった生徒たちも次第に防災や減災の視点からの質問も出るようになり、休憩時間にも各自で職

員の方と意見交換を行いました。次に、地震・津波警報が発令されたときを想定した電車からの避難訓練にも参加させていただきました。組み立て式の階段を利用した降車だけでなく、電車から線路に飛び降りる避難方法も教えていただきました。生徒から「電車から線路までは思っていた以上に高さがあった。しかし、きちんとした降り方をすれば恐怖感はなく降りることができた」などの意見が出されました。また、「地震・津波からの避難では電車の運転手と車掌の二名で多くの乗客を避難させるため、率先避難者と呼ばれる一般の乗客の協力が必要で、そういった避難を率先して実行できるように避難方法を考えていくことに加

JR東日本仙台支社宮城野運輸区主催の意見交換会に参加（令和三年八月）

え、自分の住む地域の避難場所はどこなのかといった地域の理解が必要だと感じました。」といった意見もあがりました。

最後に、シミュレーターを利用した運転体験・車掌体験をさせていただきました。感謝申し上げます。

日頃なかなか考える機会がない、電車に乗っているときの津波避難の方法を様々な経験を通して幅広い視点から考える貴重な機会になりました。この意見交換会で感じた課題や災害を学ぶ高校生ならではの気づきを課題研究でさらに深め、次回の意見交換会で提



栗駒・気仙沼巡検 (災害科学科二年)



ただきました。本校も「まち歩き」を実施していますが、震災を語り継ぐ活動に取り組み、同年代がここにもいることに、背中を押された様子でした。

形成の末に砂浜を残すことに成功した大谷海岸防潮堤、後背地がそのままとなっている小泉海岸防潮堤の様子を対比し、復興とはその地域に人が住まうことが前提であり、その議論にいか

昨年中止となりましたが、例年ですと二泊二日の日程で県内外の防災・減災に取り組む学校を招待し、災害科学科生のファシリテーションで進行する多賀城市民会館でのワークショップ、ポスターセッションや被災地案内などを通して交流する行事です。

を感じる場面が数多く見られました。最後は東北学院大学・和田正春先生から講評をいただき、「伝えるけども伝わらない事実がある。これをどう乗り越えるか」という問いかけに、伝承の難しさやこれからの世代がどうあるべきか、皆が真剣に受け止めていた様子でした。

災害科学科二年生がSSHスキルアップ研修Ⅱ「栗駒・気仙沼巡検」として、岩手宮内陸地震の被災地である栗原市・一関市に加え、気仙沼市・南三陸町で東日本大震災に対する理解を深めました。

初日は東北大学の高嶋礼詩教授を講師に迎え、岩手宮内陸地震を扱いました。栗原市ジオパークビジターセンターを訪ね、ジオガイドさんの案内によって荒砥沢ダムや崩落地を訪れ、発生から十三年を経た岩手宮内陸地

震を学びました。午後に訪れた祭時震災遺構では、地震によって大きく破壊された橋を目の当たりにし、地すべり災害がどのような背景によって引き起こされたのか、現地で高嶋先生から解説いただいた後、夜は仙台近辺の歴史を振り返り、どのような過程を経て岩手宮内陸地震に至ったのか、そして過去のカルデラ噴火による火砕流堆積物が広範囲で滑ったことに起因することを学びました。

午後は気仙沼市東日本大震災津波伝承館へ移動し、芳賀一郎先生からの講話の後、気仙沼向洋高等学校の「向洋語り部クラブ」の皆さんに館内を語り部として案内してい

三日月は朝食前に希望者を対象として、魚市場見学を行いました。早朝にもかかわらず十四人の生徒が参加し、講師の阿部正人先生の案内のもと、早朝から鯉の水揚げの様子を見学しました。水産業の片鱗を垣間見るとともに、この地域がいかにかに漁業とともに栄えてきたかを肌で感じる事ができました。

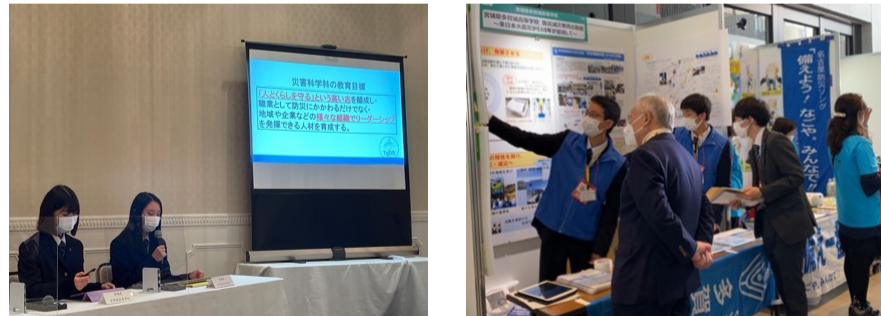
二泊三日という長丁場でしたが、二つの災害を科学的・社会的視点に捉え、災害そのものへの視点は単一なものではないことを改めて学ぶ場となりました。今後の災害科学科諸君の飛躍に今回の巡検が強き足がかりとなつて、防災・減災・伝災を学んだ者として未来を担う有為な人材になつてほしいと願っています。

二日目には本校の体操服を製作する株式会社明石スクールユニフォームカンパニー主催のセッション『こどもが夢中になる防災教育』も主体的・対話的深い学びの具体的展開『に生徒二名が登壇し、これまでの学びや災害科学科に入った理由などを説明し、前林清和教授(神戸学院大学)や諏訪清二先生(防災教育学会会長)、榊原隆様(上記会社第二販売部長)とともに防災教育を実際に受けている立場から対談を行いました。多くの人が聴く中でも、堂々と自分たちの考えを伝え、ディスカッションを行うことができました。



大谷海岸・小泉海岸二つの防潮堤に実際に立ち、地域住民との合意

ぼうさいこくたい2021に参加 (令和3年11月・岩手県釜石市)



令和三年二月六日(土)七日(日)ぼうさいこくたい2021に災害科学科二年生四名が出席してきました。全国から非常に精力的かつ先進的に防災・減災・復興に取り組んでいる研究機関や官公庁省、NPOをはじめとした諸団体や企業が集まり、それぞれの活動を報告し、学ぶことのできる場です。その中に、多賀城高校が唯一の高校生として本校の取組を発表してきました。研究者や企業を中心とする方々に加え、多くの一般の方にも本校の取組を聞いていただき、高校生だからこそできること・伝えられることを生徒たちが精一杯伝え、対話を通して深く考える機会となりました。

二日目には本校の体操服を製作する株式会社明石スクールユニフォームカンパニー主催のセッション『こどもが夢中になる防災教育』も主体的・対話的深い学びの具体的展開『に生徒二名が登壇し、これまでの学びや災害科学科に入った理由などを説明し、前林清和教授(神戸学院大学)や諏訪清二先生(防災教育学会会長)、榊原隆様(上記会社第二販売部長)とともに防災教育を実際に受けている立場から対談を行いました。多くの人が聴く中でも、堂々と自分たちの考えを伝え、ディスカッションを行うことができました。